

和田實の幼児教育の目的論

Study on Object theory of early childhood education in Minoru Wada

古 橋 和 夫

FURUHASHI Kazuo

一、はじめに

本稿は、和田實（1876～1954）の幼児教育論について、幼児教育の目的論の理論的変遷を考察することを目的としている。

和田實は、幼児教育に「訓育的誘導論」「遊戯的教育論」という概念を提唱して、遊びを中心とした保育論を展開した人物として、幼児教育史上著名な人物である。彼は、神奈川県の小学校教員であったが、1905年に女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の嘱託となり、保育実習科を担当したことによって幼児教育と関わりが生まれた。その後、中村五六との共著『幼児教育法』（1908年）を著し、さらに幼児教育関係雑誌『婦人と子ども』（後に『幼児の教育』に改題）の編集に携わり、数多くの論考を発表した。しかし、1915年同校を退職。その後は目白幼稚園（1915年）を創設、1930年には目白幼稚園保母養成所（現東京教育専門学校）を創設し、幼児教育の実践とそれを踏まえた理論形成につとめ、さらに保育者の養成に尽力した人物である。

和田は、生涯において幼児教育に関する3つの重要な著作、『幼児教育法』（1908年）、『実験保育学』（1932年）、『保育学』（1943年）を発表した。彼の教育理論は、これらの著作を中心として論じられることが多い。しかし、第1と第2の著作の間に『幼児保育法』（1913年）が出版されている。この本は、1913年7月、大阪市北区保育会から「幼児保育法講習会」の講師を要請され、1週間にわたって「幼児保育法」の講義を行ったことによって発刊されたものである。当時、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の訓導兼助教授の立場にあったが、1912年4月より小学校専任となり、附属幼稚園とは「絶縁」（和田）していた。しかし、既に『幼児教育法』を著し、『婦人と子ども』誌に数多くの論考を発表していたこともあり、「著述の責任」から講師を引き受け、またこの機会を利用して幼児教育に関する理論を全面的に展開することにした。本書は、このように幼児教育に関する体系的な理論を展開したものであるにも関わらず、従来あまり注目されてこなかった。

『和田實遺稿集』（東京専修学校編、1976年）を編集した渡部晶氏は、和田の著作として『幼児教育法』（1908年）、『実験保育学』（1932年）、『保育学』（1943年）の3冊を指摘するにとどまっている。⁽¹⁾ また、和田実の幼児教育論を体系的に論じた辛椿仙氏の『和田実における「幼児教育論」－その成立と展開に関する研究』（2000年）も、「和田の三大著作である『幼児教育法』『実験保育学』『保育学』、幼児教育関係雑誌『婦人と子ども』（のちに『幼児の教育』に改題）に載せた幾多の論文を分析」したものであった。⁽²⁾

この本に言及した論文に木下比呂美氏の「和田実の幼児教育論—特に知育論について—」（1974年）がある。木下氏は、当時の幼児教育論を「倉橋惣三に代表される、心情の教育を中心とした考え方」と「和田実によって理論化が試みられた、知育中心の考え方」に区分し、その上で和田の知育論を分析している。^③ 和田は、確かに幼児教育の中に知育を位置づけようと試みているが、しかしこのことは、彼が幼児教育の中心に知育をおいていたということを意味するものではなかった。目的論に関する本稿の考察は、この点に関する再考となるであろう。

そこで、本論文の目的をより具体的に述べておくならば、『幼児保育法』（1913年）を含め、和田実の幼児教育の目的論を、『幼児教育法』（1908年）、『実験保育学』（1932年）、『保育学』（1943年）の中に考察し、「智育」論を展開した『幼児保育法』（1913年）、「興味」を目的に位置づけた『実験保育学』（1932年）、「多方の興味の発展」と学習と経験を結びつけた『保育学』（1943年）へと続く、和田の目的論の変化と理論的深化を明らかにすることにある。

二、幼児教育の目的（1）－『幼児教育法』（1908年）

和田の最初の著作である『幼児教育法』は、東京女子高等師範学校助教授の時、同校教授の中村五六と共著の形で出版されたものである。本書は、幼稚園教育について論じたものであるというよりは、「児童の生れ落ちてより小学校就学に至る迄の教育に関して其目的と方法とを組織的に説明せんことを企画したもの」（中村・和田 1908, p.3）であり、家庭教育を視野に入れたものであった。

こうした課題意識にもとづいて、『幼児教育法』の第三章「保育の目的」において、幼児教育の目的論が探求されている。目的論を導きだす論理は、その後の著作『幼児保育法』『実験保育学』にも踏襲されるものであるので、その論理展開をここで具体的に明らかにすることにしよう。

和田は、教育とは人生の目的を達成するための準備であるとし、人生の目的を尋ねることから始める。人生の目的とは何か。和田によれば、人生の目的として、優美高尚、善、快樂等さまざまに論じられているが、それは結局、「道徳的生活の完成」にある。したがって、教育の目的は、「人をして道徳的生活を完成せしむる為の準備」をすることにあった（同上、p.17）。しかし、こうした目的は、最終の形式的目的であって、幼児教育の「近切な目的」ではないことは明らかである。

では、幼児教育の近切で実際的な目的とは何であろうか。和田は、それを「身体健全にして常識常態を有すること」「職業を有し資産を有すること」であるとして論を進めている（同上、p.18）。前者は普通一般の教育、後者は職業教育のことであるが、幼児教育は当然普通一般の教育に入るものである。そこから、和田は、小学校教育の目的（普通一般の教育）から、幼児教育の目的を関連づけて考察しようとする。当時の小学校令によれば、「小学校は児童身体の発達に留意して道徳教育及び国民教育の基礎並びに其の生活に必須なる普通の智識技能を授くることを以て本旨とする」（小学校令 第一条）ものであった。小学校令のこの規定は、体育（児童身体の発達）、徳育（道徳教育、国民教育）、知育（日常生活に必須なる智識技能の授与）の3つを教育の目的としたものである。和田は、これらの目的と関連させ、幼児教育との同一性と差異性の観点から、幼児教育の目的とその独自性を明らかにしようとする。

第1の「体育」については、幼児を「保護防衛するに多大な力を要する」（同上、p.21）こと、衛生上の習慣の獲得は、教授によっては十分ではなく反復練習を必要としていること等から、小学校の体育とは異なるものであると考える。「徳育」については、幼児教育の場合、「人倫道徳の要旨を教授するこ

とが出来ない」ものであるから、「無意識的感化的誘導若しくは暗示的誘導」（同上、p.22）によらなければならないものである。また、「知育」については、「日常生活に必須なる智識技能を教授することは出来ることではなし又すべきものでもない」（同上、p.22）ものであった。言い換えれば、幼児教育の目的は、次の2項に概括されるものであった。

- 一 幼児の心身をして健全なる発達を遂げしむること。
- 二 其習慣的行動をして善良ならしむこと。

これは、当時の法令「幼稚園保育及び設備規定」（文部省令、1899年）に基づくところのものである。⁽⁴⁾ 和田は幼児教育の目的について次のように述べている。「要するに幼児の身体が健全に発達し其心力が健全に活動してさへ居れば小学校に於いて教授を行ふに何等の差支もなし、其習慣的行動が善良であるならば次の道徳的陶冶は滑かに進行するに違ひない。・・・故に吾人は此二項を以て幼児教育の目的を統括せるものと認めるのである」（同上、p.25）。

『幼児教育法』（1908年）における和田の目的論は、このように「幼稚園保育及び設備規定」を越えるものではなかった。また、幼児教育の目的論を導き出す方法として、人間の目的、教育の目的から論を起し、小学校令に規定されている体育、徳育、知育と関連させて、幼児教育の目的を論じている。そして、幼児教育には、小学校とは違い実質的なものがない主張した。これは当時まだ根強くあった幼児教育の否定論を強く意識するものであり、幼稚園教育の意義を論じ、その独自性を目的論において主張するものであったといつてよいであろう。

ところで、「幼稚園保育及び設備規定」は、心身の健康と善良なる習慣を目的と規定しているが、和田はこうした幼児教育の目的論に満足していたわけではないことが容易に想像される。つぎに、『幼児保育法』（1913年）を見てみよう。幼児教育の目的論の考察という観点から本書は重要な著作であった。

三、幼児教育の目的（2）－『幼児保育法』（1913年）

1913年7月、大阪市北区保育会から「幼児保育法講習会」の講師を要請され、和田は「幼児保育法」の講義を行った。『幼児保育法』は、その講演をまとめたもので、文体は話口調であるが、当時の和田の幼児教育理論を体系的に論じており、彼の幼児教育理論の形成を考える上で重要な著作である。講演に臨む問題意識は、『幼児保育法』の序に明らかである。幼児教育に関する当時の著作は、和田によれば「何れも偶感的随筆的読み物」か「現在の不完全なる教育学の全体を平易に書きなした」（同上、序）ものでしかなかった。しかし、「幼児教育法は児童の生れ落ちてより学齢に達するまでの全教育を説明しなければならぬ。而して幼稚園教育は此理論よりして演繹されねばならぬものである」（和田、1913、序）。

本節では、『幼児教育法』（1908年）と比較して、和田の幼児教育の目的論を考察し、その理論的発展と「知育」に関する独自の考えを明らかにする。

和田は、幼児教育の目的を考察するにあたって、「人間の目的」及び「教育の目的」について明らかにしておくことが必要であると述べている。こうした論理展開は前著と同様である。それでは、本書における「人間の目的」と「教育の目的」とは何であろうか。「人間と云ふものは生活の完成と云ふことを目的として居る」（同上、p.29）が、その生活の完成とは社会という形容詞を持っているものである。つまり、「生活の完成は単に個人的生活の完成ではなく実は社会的生活の完成」（同上、p.29）である。

この社会的生活の完成が人間の目的であるならば、教育はそれを準備することをもって、その目的としなければならないと考える。

そのため、教育はふたつの部分に分けられる。普通教育と専門教育（職業教育）である。幼児の教育は、もちろん専門教育（職業教育）ではなく、普通教育でなければならない。では、普通教育の目的はどこにあるのであろうか。それは4つに分けられるものである。

- 一 心身の健全なる発育
- 二 日常生活に必須なる知識技能の授与
- 三 品性の陶冶
- 四 芸術の修養

普通教育のこれらの目的を達した基礎の上に、職業に対する準備教育（専門教育）がはじまり、教育は完成するものである。和田は、前著と同様に、幼児教育の目的を普通教育の目的と関連させ、演繹する形で導き出そうとする。それは、「保育は教育の一部であり、教育学が教育の全般を説明すべき科学である以上、保育法は当然、教育より演繹せられねばならぬもの」⁽⁵⁾であり、保育を教育学中に統一しようとする意図からであった。

ところで、普通教育の上の4つの目的は、幼児教育にあてはまるものであろうか。

「一、心身の健全なる発育」については、幼児教育の目的になることは当然のことである。和田の立論の特色は、「二 日常生活に必須なる知識技能の授与」にある。前著と同様に「知識技能の授与」を否定し、知識・技能を教えることは小学校教育の目的であるが、幼児教育の目的ではないことを、文字の習得等を事例にあげて次のように説明する。

いろは四十七文字は、幼児に覚えさせることは可能であるが、「子供が小学校にはいる前にいろは四十七文字を覚えて居ないからといって、それが何うも普通教育の上に非常な障碍になるといふことはありませぬ。唯覚える時が少し遅れるといふに過ぎないのであります」（同上、p.32）。字を書くこと、絵を描くこと、はさみ・のこぎりなどの道具を使うこと、ピアノを弾くことなどは、幼児であってもかなりの発達が可能であるが、これらの技能がない場合でも、小学校の教育に不都合はないとしている。つまり、幼児教育においては、甲の幼児と乙の幼児に「共通した一定の智識技能を授けることは出来ぬ」（同上、p.34）ものであり、「幼児教育では具体的に確定した処の或る特殊の智識、定まった所の或る特殊の技術といふ様なものを授けることは出来」ないのである（同上、p.34）。知識・技能の教育が可能であるとしても、すべての幼児に共通して与えられるべき知識・技能を確定することはできないからである。

幼児教育が小学校以上の教育と区分されるところは、この「智識技能の教授」のないところにある。和田は次のように主張する。「身体なり心なりが十分に活発に多方面に完全に其の働きを現し得るやうに十分に練習が出来て居て、何時でも目的に応じて自由自在に働くことが出来るといふ其處が幼児教育としては是非とも達して居なければならぬ所であります。それ以上或る定つた智識技能を授けるといふやうなことは、幼児教育の目的として持たなくても宜しいので、之が小学校以上の学校教育と違つて居る處」である（同上、p.35）。

ここで注意すべきことは、「智識技能は授けない」が、幼児の「智能其もの」は十分発達させてやらなければならないと考えている点である。幼児教育は「情意の教育」が主であるが、「智育」というものが全くないわけではないのは、和田によれば、心の働きである「智情意」は、個々別々に働くもので

はなく複合的なものであるからである。「智情意は、決して心の三成分ではない、即ち情の部、意の部、智の部といふ風に三つの部分が集まって心を成して居るのではなく。唯心の働きの現れ方の方面が違ふだけ」なのである（同上、p.61）。「幼稚園の教育は智情意即ち心の全体に関係して居る」（同上、p.61）のであるから、「智育」は決して無視することのできないものである。

では、幼稚園の「智育」が教授によるものではないとするならば、「智育」はいかにして可能となるのであろうか。和田は次のように答えている。「記憶であるとか、観念内容であるとか、想像力であるとか、注意力であるとかさういふ智的の働きは学校に於ては算術を教へて子供の推理力を練り、国語を教へて種々の記憶力を練習し、種々の話を聴かして想像力を練習致しますが、併しさういふことをしないで何うして智力を錬ることが出来るかといふと幼稚園では遊戯でやるのであります。遊戯といふものに依つて子供の智力を錬るのである」（同上、p.60）。そして、「智育」には、2つの方面があるとする。「一つは日常生活に必須なる智識技能を与ふる実質面と、一つは智力を錬る形式方面であります。幼稚園では形式方面の方は出来ます」（同上、p.60）。幼稚園で行う知育は、実質方面ではなく、記憶力、注意力、推理力、想像力等を育成する「智力を錬る形式方面」である。この面の育成は、幼稚園の遊戯によって十分可能であると和田は考えた。したがって、実質面での知育はないが、形式面での教育は、幼稚園においても徐々に進めていかなければならないものであった。こうした和田の考えは、記憶力、注意力、推理力、想像力等の精神的諸能力の育成を重視する形式陶冶説であり、これらの育成が遊戯によって可能であると論じているところに彼の知育論の特徴がある。「幼児教育は主観的形式的なり」としたのは、このような意味においてであった。

「二 日常生活に必須なる知識技能の授与」という普通教育の目的は、幼児教育の場合、「心身の活動の多方なる練磨」とへと修正されることになった。後に『保育学』において「学習の基礎としての多方の興味の発展」（『保育学』1943、p.10）となるところである。また、「多方の興味」は、学習の基礎と関連づけられ、目的論のなかのなかに位置づけられることになるであろう。

第三の品性の陶冶については、「これは幼児教育では望みが大き過ぎて到底達することが出来ないこと」（和田 1913、p.35）であるので、品性陶冶の基礎となる「善良なる習慣の養成」という目的に言い換えられなければならないものである。

第四の芸術の修養については、「趣味の養成」という心の方面と「技術の練習」の二つに区分できる。幼児教育の目的としては、「趣味の涵養」は形式的方面に限るのが適當であると和田は考えている。結局、幼児教育の目的は、次の4点にまとめられることになった。

- 一 心身の健全なる教育
- 二 心身の活動の多方なる練習
- 三 善良なる習慣の養成
- 四 趣味の涵養

「趣味の涵養」として美育の面を取り上げているところは、前著にない新しい視点である。また、「第一と第三の目的は主として訓練の方で達することが出来、第二と第四は遊戯の指導に依つて達することが出来る」（同上、p.47）としている。幼児教育の目的論は、このように「訓練」「遊戯」という指導方法と関連づけられている。幼児教育の目的論を指導方法と明確に関連づけているところに理論的發展を見ることができる。

四、幼児教育の目的（3）－『実験保育学』（1932年）

本書は、「幼児教育の根本原理を教育学に尋ね、而して、此原理に即したる合理的幼児教育方案を説明する」（和田、1932、p.21）ものであった。第四章の教育の任務において展開される目的論は、「興味」の概念を導入したことに新しい展開を見ることができる。目的論の全体は、従来の説を簡潔にまとめたものであり大きく変わっていないが、繰り返しをおそれず紹介してみよう。

教育は人生生活の準備にあるが、それは普通教育と専門教育によって準備されるべきものである。そして、児童はまず一般陶冶を受ける必要がある。また、幼児教育は、小学校以上の普通教育と同一の任務を持つべきものではなく、幼児の「無力と幼弱」を考慮するならば、多少の差異があるものである。そして、普通教育の体育、知育、徳育との比較において、幼児教育の目的について次のように考察する。

体育は、身体の健全なる発達を目的とするもので、その意味で幼児教育においても目指すべき目的となる。しかし、「剛健なれ、鍛錬的に努力せよとは要求し兼ねる」ものであって、「其の健康を保全し、徐々に其四肢身体を活用し練習せしめんことを努める」べきものである（同上、p.27）。「智能の教育」も、体育と同様に「幼児教育に於いては斯く形式、実質、相共に充実せる目的を強いることは困難である。唯、段々と啓発し来る諸能力を誘導し心力を啓発し其筋肉を練習するを以て当面の任務とするに止まる」ものである（同上、p.27）。また、道徳的陶冶についても、「徳性を保護し性情を涵養して、品性の基礎を造らんことは幼児教育の常に努む可き任務である」（同上、p.27）が、徳行を鍛錬し強固なる意志と識見を得ることは、幼児教育の目的とすることはできないとする。

幼児教育の任務をまとめ列挙すると、次の4点となる。

- 一 心身の健康を保全す。
- 二 心身の健全なる発達を助成する。
- 三 必要なる興味を培養す。
- 四 善良なる習慣を馴致し其性情を涵養す。

一は二の中に含めて心身の健全な発達に、また三と四をまとめ善良なる心情の涵養とした。これらの目的論は「幼稚園令」（1926年）に基づくものである。「幼稚園令」によれば、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シテ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的」としている。結局、「幼児教育の任務は主として、形式的であり、主観的であって、人生生活に必須なる智識、技能と云ふ様な実質的方面には然したる努力を注ぐ訳には行かぬものであることを認めねばならぬ」のである（同上、p.28-29）。

これらの和田の主張は、「幼児教育は主観的形式的なり」（同上、p.53）とする従来の説を踏まえたものであるが、「三、必要なる興味を培養す」ることを目的のひとつに位置づけたところは、新しい観点であった。「興味」は、幼児教育の方法であると同時に、目的のひとつとなっている。本書発刊の前年、和田は「幼稚園教育の要旨」（1931年）という論文において、「幼稚園教育の目的は興味にありと言つても大した間違はないことになる」と述べており、ヘルバルトにも言及し「多方面の興味の喚起」について、大いに意味あることとした。また、興味と遊戯の関係について「互ひに原因となり結果となつて発達していくものである」とし、多方面に広がる興味の発達についても考察している。⁽⁶⁾

しかし、『実験保育学』においては、四の目的と一緒にまとめられ「善良なる性情を涵養」とし、幼稚園令の目的と結びつけている。「必要なる興味の培養す」という目的論は、次の『保育学』（1943年）

でさらに明確に位置づけられることになる。

五、幼児教育の目的（４）－『保育学』（1943 年）

本書は、和田が経営する保姆学校の生徒に向けて、心理学、教育学の進歩に照らして自説を補訂し発行されたものである。和田によれば、保育学を創始してから 40 年を経たが、この間「保育の理論に於いては、さしたる進歩なく、保育学の内容は、依然として、組織なく、系統なき常識論に過ぎざる観あり」という状況であった（和田、1943、p.3）。また、本書は家庭における母親の参考書、「幼稚園及託児所の保姆諸姉の研究資料」（同上、p.3）となるものであった。幼児教育の目的に関する和田の考えは、従来の説を踏まえたものであるが、「興味」に関する点は注目に値する。この点に着目しながら和田の目的論を明らかにする。

さて、和田によれば、幼児教育の任務は 3 つに区分されるものである。

第 1 は、「健全なる発育」と「直観的知覚や想像的作用、記憶作用の発達、諸情緒の訓練や、努力的意志の陶冶等其重なるものである」（同上、p.7）。しかし、後者の直観的知覚、想像作用、記憶力、諸情緒の訓練、努力的意志の陶冶は、結局のところ、「健全なる発育」に帰一するものであり、健全な発育が、第 1 の目的となる。

第 2 は、文化人として具備すべき諸性情と諸性能の基礎を培うことである。「具備すべき諸性情と諸性能の基礎」とは、道徳的社交的本能、研究本能、学習本能、発表本能、創作本能のことである。これらは、デューイの衝動・本能観を思わせるものがある。学校で利用できる子どもの衝動と興味は、デューイによれば、4 つに分類できるものであった。社会的本能、製作本能、探索本能、芸術本能在それぞれである。「これら四つの興味－談話、すなわちコミュニケーションの興味、探求、すなわち事物を発見する興味、物を制作すること、すなわち構成の興味、および芸術的表現の興味は・・・自然の資源であり、投資されざる資本であって、子どもの活動的な成長は、これらの興味を働かせることにかかっている」。(7) 和田の 5 つの本能論は、彼の子ども観を示すとともに、デューイから多くのことを学んでいたことを暗示するものであるが、この点についてはさらに別の考察を必要とするものである。

第 3 は、「学習の基礎たる可き多方の興味、豊富なる経験、技巧的動作や手工等の発達」である（和田、1943、p.8）。国民学校における学びの基礎として、幼児教育においては、幼児の精神力、つまり興味と努力的意志の発達が必要である。幼児教育は、国民学校の教科課程を内容的に先取りすることではなく、これらの基礎的心理的発達そのものが国民学校への準備となるものである。したがって、幼児教育の任務は、次の 3 点にまとめられる（同上、p.10）。

第一は、幼児の健康の保全と其強化並に健全なる発育の助成。

第二は、文化人として発達す可く、其性能性情の陶冶並に其生活の指導、誘掖。

第三は、学習の基礎としての多方の興味の発展を企画し、豊富なる経験を興えること。

幼児教育の目的は、以前と同様に「主として其主観的形式的発達のみに向けられて、其内容たる実質には重きを置く」ものではなかった（同上、p.11）。しかし、和田が目的論の第三において「多方の興味」という概念をあげ、その発展のために「豊富なる経験」を与えることで、学習の基礎とするとしている点は重要な指摘である。「幼児教育は善良有為なる可き興味を培養して、斯る強力なるものとし、後来の教育に備ふるを以て其理想とするものである」とも述べている（同上、p.111）。このように、幼児が

示す興味を発展させることは、幼児教育の理想であり、小学校教育との連続性は、この「多方の興味」の育成にあった。

この「多方の興味」は、ヘルバルト教育学の重要な概念である。ヘルバルトは教授の手段とされてきた「興味」を教授の目的に位置づけたが、和田はこのヘルバルトの「多方の興味」を援用し、幼児教育の目的としたのである。和田は次のように述べている。「ヘルバルトは多方の興味をもって教授の形式的目的とした。吾人は之を我が幼児教育に移して、多方の興味を誘導することをもって幼児教育有終の目的とせんとするものである。実に興味は幼児教育上、遊嬉選択の標準となり、遊嬉指導の指針となり、遊嬉的教導の理想となるもある」（同上、p.112）。目的論の「多方の興味」は、「幼児教育有終の目的」となり、保育内容（遊嬉の選択）の標準、保育方法の指針であり理想となった。目的論としての「多方の興味」は、このように幼児教育の各論と結びつくものである。

『保育学』における目的論の特色は、従来の心身の健全な発達と善良なる心情の涵養に加えて、「多方の興味の発展」を明確に位置づけ、保育内容と保育方法の指針として、幼児教育の目的の独自性を明らかにしたところにあった。それは、和田の目的論の理論的到達点となったと評価することができる。「多方興味」を含む3つの目的は、「幼稚園令」に規定する目的論をふまえて、幼児教育が目指すべき方向を示すとともに保育内容と保育方法の指針となる働きを持つものであった。

六、まとめ

和田実の幼児教育の目的論を、『幼児教育法』（1908年）、『幼児保育法』（1913年）、『実験保育学』（1932年）、『保育学』（1943年）の中に考察し、目的論に関する理論形成史を跡づけてきた。

『幼児教育法』（1908年）における和田の目的論は、「幼稚園保育及び設備規定」に基づくものであり、小学校令の目的から幼児教育の目的を導き出す方法がとられている。小学校令の教育目的である体育、徳育、知育との関係において、幼児教育の独自性を明らかにしている。『幼児保育法』（1913年）においては、「趣味の涵養」として美育の面が取り上げているが、これは前著にない新しい視点であった。また、幼児教育の目的論と指導論を関連づけ、幼児教育における「知育」について具体的理論的に論を展開した。さらに『実験保育学』（1932年）においては、「必要なる興味を培養す」ことを目的のひとつに位置づけた。「興味」は、幼児教育の方法であると同時に目的のひとつとなった。この「興味」は、『保育学』（1943年）において、「多方の興味の発展」として、幼児教育の目的論のひとつとして明確に位置づけられることになった。そして、この「多方の興味の発展」は、遊嬉選択の標準、遊嬉指導の指針、遊嬉的教導の理想となり、保育内容と保育方法論との関連が一層明確になっている。『保育学』の3つの目的は、「幼稚園令」の目的論をふまえ、幼児教育の方向性を示すとともに教育内容、教育方法の指針となる働きを持つものであった。

幼児教育の目的論の変遷を跡づけてきたが、その理論形成は、幼児教育の独自性を探求したものである。和田の最後の著作である『保育学』において、「多方の興味の発展」を目的論に位置づけたが、それは幼児教育の「有終の目的」となり、遊嬉的教育論と有機的に結びつける観点となった。「多方興味の発展」を目的論に位置づけ、「学習」、「多方興味の発展」、「経験」を関連づけたことは、和田の目的論の到達点を示すだけでなく、現代的な意義を持つものである。幼児教育における「豊富な経験」を「学習の基礎」と結びつける媒介項として「多方興味の発展」を位置づけたことは、幼小の連続と連携を考

察する上で、ひとつの観点を与えるものである。また、保育方法の指針となり遊びを評価する視点となるように思われる。

今回の論稿は、幼児教育の目的論について限定して論じたものであり、和田の幼児教育論をさらに体系的に論ずるには、訓育的誘導論、遊戯的教育論、幼稚園論等の理論の考察が求められる。また、これらの理論と目的論との関連について研究することは今後の課題である。

注

- (1) 『和田實遺稿集』、東京教育専修学校編（1976年）における渡部晶氏の序文
- (2) 辛椿仙『和田実における「幼児教育論」－その成立と展開に関する研究』 東京教育専門学校 2000年 p.20
- (3) 木下比呂美「和田実の幼児教育論－特に知育論について－」 林学園女子短期大学紀要、第1号、1971年 p.138
- (4) 幼稚園教育設備規定（1899年 文部省令）は次のように規定している。「幼児ヲ保育スルニハ其心身ヲシテ健全ナル发育ヲ遂げ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハンコトヲ要ス」
- (5) 和田實「お茶の水時代－思い出をたどる」『幼児の教育』1933年 33巻3号、p.73
- (6) 和田實「幼稚園教育の要旨」『婦人と子ども』第17巻6号 p.214
子どもの興味の順序について、次のように述べている。「(一) 経験的興味（経験、求知、好奇、滑稽）（二）模倣的興味（模倣、学習）、（三）練習的興味（体習、活動、運動）、（四）作業的興味（構成、蒐集、推究、論理、藝術）、（五）社会的興味（社交、争闘、権力、道德）、（六）理論的興味（凡ての統一）・・・第四、第五あたりになつて来ると横にひろがつて行き、多方面に分派して行くのである。これらの興味が十分に発達した後、最後に理想的興味が起つて来て、これらの興味を統一するのである」。
- (7) デューイ、宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫 p.63

和田實の著作（一次史料）

- ・和田實（1906）「幼児教育の特色」『婦人と子ども』、第6巻10号
- ・和田實（1907）「一般教育か特殊教育か」『婦人と子ども』、第7巻10号
- ・中村五六、和田實（1908）『幼児教育法』フレーベル会
- ・和田實（1913）『幼児保育法』北区保育会
- ・和田實（1930）「懷古」『幼児教育』、第30巻4号
- ・和田實（1931）「幼稚園教育の要旨」『婦人と子ども』、第17巻6号
- ・和田實（1932）『実験保育学』東京教育専門学校
- ・和田實（1933）「御茶の水時代－思い出をたどる」『幼児教育』、第33巻3号
- ・和田實（1943）『保育学』日本保育館

引用・参考史料

- ・木下比呂美（1970）「和田實の幼児教育論～特に知育観について～」 林学園女子短期大学紀要 第1号
- ・日吉佳代子（1987）「誘導教育に関する一考察 その（1）～和田實と倉橋惣三の保育理論～」東京教育専門学校紀要 第1号
- ・日吉佳代子（1990）「誘導教育に関する一考察 その（2）～和田實と倉橋惣三の保育理論～」東京教育専門学校紀要 第2号
- ・日吉佳代子（1995）「和田實の保育思想 その形成過程と発展（1）～『幼児教育法』が著されるまで～」東京教育専門学校紀要 第3号
- ・日吉佳代子（1995）「和田實の保育思想 その形成過程と発展（2）～中村五六、東基吉、和田實の関わりについて～」 「日本保育学会第48回大会発表論文」
- ・日吉佳代子（1998）「和田實の保育思想 その形成過程と発展（3）～時代背景および3著書「総論の分析」～」 東京教育専門学校紀要 第4号
- ・大谷祐子（2006）「和田實における幼児教育論（1）－成立過程とその特徴－」和泉短期大学研究紀要 第27号
- ・大谷祐子（2007）「和田實における幼児教育論（2）－「訓育的誘導論」について－」和泉短期大学研究紀要 第28号
- ・大谷祐子（2008）「和田實における幼児教育論（1）－「遊戯的教育論」について－」和泉短期大学研究紀要 第29号
- ・戸江真以（2017）「和田實の「音楽的遊戯」論」 広島大学、音楽文化教育学研究紀要 29号
- ・『和田實遺稿集』（1976） 東京教育専修学校編
- ・『和田實の幼児教育論についての研究論集』（2003）東京教育専門学校編